THE LADIES' JOURNAL OF EDUCATION.

女學雜誌

驛遞局認可　明治十九年四月三日　毎土曜日發兌　第六拾號

此の繪の說明ハ本紙中ニ在り

The Engraving illustrated in another page.

東京京橋區南鍋町貳丁目壹拾番地　發行所　績文舍

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學叢誌第十六號目次

●官報●女學叢譚●女子の敎育ハ急進より寧ろ漸進●中外新報數件●家庭の鑑●英語の栞（附羅馬字話はなし）●内外烈女傳●小栗助重の妾娥子（表書傳）●船將の妻リンカルド氏の勇氣（前號續）●松田さつ女の傳（續稿）●群芳詞苑詩歌數件●女紅●產湯の湯上げを縫ふ法●裁縫●絹布を張る法●香道●ワールン氏西洋料理法の翻譯（前號の讀き）稗史小說●英國小說（第貳回）●御伽草●謎謎●考へもの●机の塵●下級の事●貝箱貝合せ●雪踏●女房の名稱●一籾七十万錢

明治十九年四月三日

本誌代價表

壹冊	正價金四錢	此郵税壹錢
拾冊	同金三拾八錢	同拾錢
二拾冊	同金七拾五錢	同二拾錢
三拾冊	同金壹圓拾錢	同三拾錢
四拾冊	同金壹圓四拾錢	同四拾錢
五拾冊	同金壹圓七拾錢	同五拾錢

但シ東京十五區內郵税不申請

本舍ハ御注文有之と雖とも前金御送附無之間ハ叢誌配達不仕事に內規相定候に付御注文の節ハ必ず代價郵税共郵便爲替又ハ通運便にて御送附あらんとを希ふ○郵券代用ハ御斷り申上候𪜈一郵便切手を以て代價御送附の節ハ壹錢切手にて一割增を乞ふ郵便爲替ハ芝區芝口郵便局へ御振込ミ其爲替券を本舍へ御送附可被下候

但し東京十五區內ハ御斷り無之間ハ引續き配達仕候

明治十九年女學叢誌每土曜日發兌表

一月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
二月	六日	十三日	二十日	廿七日	
三月	六日	十三日	二十日	廿七日	
四月	三日	十日	十七日	廿四日	
五月	一日	八日	十五日	廿二日	廿九日
六月	五日	十二日	十九日	廿六日	
七月	三日	十日	十七日	廿四日	卅一日
八月	七日	十四日	廿一日	廿八日	
九月	四日	十一日	十八日	廿五日	
十月	二日	九日	十六日	廿三日	三十日
十一月	六日	十三日	二十日	廿七日	
十二月	四日	十一日	十八日	廿五日	

廣告料定則

一行二十七字詰	壹回分	二回分	三回分	四回分
自一行至十行	八錢	七錢	六錢五厘	五錢
自十一行至二十行	七錢	六錢五厘	六錢	四錢五厘
自二十一行至三十行	六錢	五錢五厘	五錢	四錢
自三十一行至五十行	五錢五厘	五錢	四錢五厘	三錢五厘

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

◎官報

本年三月廿五廿六日

○文部省令第四號

北海道廳府縣

學務課長及び府縣立學校長の變更進退の節ハ其姓名官等俸給履歴を具し開申すべし

明治十九年三月廿五日　文部大臣森　有禮

○文部省令第五號

北海道廳府縣

明治十八年十月文部省第十一號達し中第二項を左の通り改正す

明治十九年三月廿六日　文部大臣森　有禮

一右生徒の學資ハ東京師範學校より支給する事
但し其旅費ハ自弁すべし

◎女學叢譚

○急激の進歩ハ却て不進歩の基　樫村鉄子

吾國女子教育の興る日猶ほ淺しと雖とも既に華族女學校より女子師範校其他女子教育の爲に特設せるもの僅少ならず邊境未だ偏ねく之れが設なしといへども公私小學男子と校を同うして教を施すもの實に林の如く至る所ろ咿唔の聲を聞かざるなし之を明治初年に比すれハ啻に雲壤の懸隔あるのミにあらさるなり妾不敏といへども此盛世に遭遇し親しく目撃するを得るハ實に歡喜に堪へざる所なり然れとも又茲に一の杞憂を抱くものあり故に今此叢紙の一端を借りて以て一言を贅せ固より固陋の管見取るに足るものなしと雖も而るも一覽を賜ハゞ幸甚なり

吾國從來女子の教育に係るもの之を舊史ニ證するニ見る所なし（蓋しこれあらん我れ未た見ざるなり）是ニ於てか今其教を設け之を誘導するに及ひて女子進取の氣像に富むを以て俄然西洋諸國と對峙して耻づる所ろなからんを欲し先つ其外貌を變し束髮以て嶋田髷にかへ和衣を脱して洋服を着し帽を戴き靴を踏ミ外而之を望めハ既に純然たる西洋婦人ニして毫も違ふ所ろなきものあり未た闔國に偏ねからずと雖とも今を以て推考すれば十年を出ずして必ず全國に及ぼさん事知るへし夫れ進むに急なるものハ後を顧るに遑あらず外を専ニするものハ内を修むるに緩なるハ理の然らしむる所ろ勢ひ制止し難きものあり然りといへども我に定見なくして人に習ふものハ遂に適從する所を知

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らず我か有る所ろの善美を含て却て彼に聞て始て我善美を知るか如きに至ること又無しと期し難し此を以て之を観れハ内を後にして外を先にするハ抑も末なりこれ妾が所謂抱く所の杞憂なり吾國古來女子教育の道に乏しといへとも婉順嫺淑清白貞固修身の道自存するものあり夫唱婦和の義其來る既に久し載籍殘缺すといへども今傳ふる所ろのもの取て以て師となし内を修るに足るもの少しとなさす今左に略述せんとす其詳細の如きハ烈女欄内に就て熟讀し給ふべし

楠公の妻ハ貞操倫ひ稀なる婦人にして殊に方略あり其子正行父の戰死を聞て悲歎に堪へず將に自盡せんとずるを見て泣て誡て曰汝か父汝を櫻井の驛より還し玉ひしハ後を弔ハしめんが爲にあらす亦以て殉死せしめんとにもあらず只君の爲に力を盡し殘黨を集めて再び勤王の兵を起さしめんか爲なり汝面のあたり父が遺訓を聞て既に忘れたるのあくのごとくんバ何を以て君を輔翼するを得んと正行始めて覺り遂に兵を起して朝敵を靡攻すこれ此母教ありて而して此子あり此談話世人のよくしる所今殊に之を擧ぐるも益なきに似たりといへとも此婦人と位置をかへてよく其當時を思ひやりて見よ身ハ金剛山の孤城にありて關東の大敵に對し共に力を合せて勤王の兵を擧るものハ甚た少なく且夫や戰死し士卒數百共に死して歸るものなきの時に當りて屈撓せす此語を發して其子を勵ます實に大丈夫にも恥ちざる所あり人の母たらんもの熟讀翫味取て師となすへき所なり白拍子の靜ハ源義經の妾なり義經沒落の後鎌倉の捕拘する所となり義經の行衞を拷問せらると雖も遂に實を言ハす頼朝其舞踏に巧みなるを聞て之を見んと欲し召して命すれども固辭して肯せず之を強るに及て和歌を裁して之を唱ふ其義經を慕ふの情詞にあらハれ聞くものをして感愴せしむ梶原景茂の醉に乘して挑むを拒み之を愧屈せしむ其妾たるハ學ふ可からすと雖も其他取て師と爲すへきもの亦少しとなさす

（以下次號）

◎中外新報

○皇后宮の行啓　皇后宮にハ去る三十日武藏艦の進水式に臨ませらるゝ爲め横須賀へ行啓あらせられたり

○御陪食　去月廿六日午後六時皇后宮にハ宮中に小松宮同御息所北白川宮三條内大臣同夫人伊藤宮内大臣同夫人松方大藏大臣同夫人西郷海軍大臣森文部大臣榎本遞信大臣を始め高倉典侍其の他顧問官　議官　陸海軍將同夫人等を召させられ御

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

陪食仰せ付けられたりと云えり

○留學　麹町區上二番町なる鹿兒嶋縣士族西川虎之助の長女清子(十二年)次女朝子(十一年)の両人ハ學術修業の爲え万里の波濤を凌ぎてはる〳〵獨逸國へ留學するとの事なるがまことよ健氣ある思ひ立にてそありけれ

○高等女學校　東京師範學校附屬高等女學校にてハ上野公園地なる四軒寺へ分校を設け私費にて通學せし生徒ハ今度ミな同分校へ移されし由

○築地公立女子小學　昨年より新築に着手せし同小學ハ已に落成して去る廿九日開校式を擧行し髙崎府知事を始め渡邊同書記官其他區長學務課長等の臨席あり生徒へハ赤飯又ハ花簪等を與えられしとの事

○蹈舞會　同會まてハ自今會員の試驗を行ひ其の熟達優等の男女會員へハ一等より五等までの卒業証書を附與し一層その舞技を奬勵するの方法を設けられしよし

○聾啞の艶書　米國紐育府にヂヨージ、パンコーストと云える人あり其の女ハ今玆二八の春を迎え深閨にありて未ざ知る人なけれど一たび笑めハ百の媚隨かつて生し六宮の粉黛顔色なかりし楊太眞もたかでモンゴリヤンの人種なればいかで及ばんクレオパトラも昔しの別嬪今ハ世界の美と云ふ美ハ全くこの女に歸する程なれども惜むべしこの女生れながらの聾よして且つ啞よおなればパンコースト氏も如何なる前世の宿業にやと常に歎息なし居りしがこの程其の女に付き一の珍事ぞ惹き起されたり即ち此の頃のとなりとのやパンコースト氏ハ僂麻質斯を退ひ打ふし居て徒然なるまゝワンドルンと云える少年を招き其體を按摩なさしめしにいかある事のむづミにや手眞似が取持つ戀の媒介遂よ其女とゆりなき中情になりけるを親なるパンコースト氏ハはやくも聞き知り手切れ話をなさんとて少年のもとへかけ合ひ我の女ハ精神羸弱にして物の道理を辨するものよあらず必らずや其方がそゝなかせしとならんと云ひたりしに少年の方にてハ其の女より送りこせし艶書數通を証據として精神羸弱の者に決して寫し得べきものよあらざれハこれ正當の情に出たるものなりと答えしより遂に一場の紛紜を醸しされば遠からす法律上の一問題を出すに至るべしと云えりてハ誠にまさなき話ながら縱令艶書にもせよ我邦の聾啞者流がよく寫そとを得るか否決して得ざるべし米國わたりにてハ已に斯くの如く精神羸弱の者の寫し得ざるほどに能く寫すものあり況して世の聾啞なゝざる人ハつとめても

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なほつとめざれバこの聾啞よも劣りて恥かしかるべし努めよやつとめよや

○英國女皇の女官　英國女皇の官女と云ふも第一を禮服掛りの貴女(ミストレス、オフ、ローブ)第二を內殿附きの貴婦人(レディース、オフ、ヘッドチャムボル)第三を內殿附の婦人(ベッドチャムボル、ウーメン)第四を榮譽の侍女(メイド、オフ、オノール)と唱へ第一禮服掛りの貴女の職權は內大臣と雖も犯すべからざるものにして內殿のこと一切を總理し官女の取締りをなしまた女皇の大禮服等を保管し時々禮式の事あるに臨みては女皇の服飾等に關する禮式を正そことを掌り公禮の時女皇馬車なれバこれと同車し步行すれば女皇の前に立ちて行く等なり內殿附きの貴女ハ當時正員八人補員五人なり內殿附き婦人と云ふもまた八人ありて女皇に近侍し何事あるも女皇に隨行そるものなり以上の婦人もみなオノレーブルと云へる名稱を唱ふることを得ると云ふ

◎庭訓の鑑

東照宮の御消息とて妾の家にもちつたへし摺物一幅あり是は神君駿河にいまそかりし時台德院殿の御臺様へ進らせられし御文なりとぞ人の母たるもの子を養育そるよ其時代身分によりてハ少の異同あるも教の道に於てハ違ふ事なし此御文ハ女子の常に心得置べきわり難き御敎えにわなればわらハ此度貴社に寄せて世間同志の方々に告けまいらするになん

番町　堀田美津子

一筆申入候先々日增に暖氣よなり候て暮しよく候ろの程彌御無事に若達も息才に候や承ハり度候冬年ハゆる〳〵御目にかゝり悅入候其節ハ何角御兩所の御世話ども老後の樂しそに御座候よく〳〵其段表えもたのみ入候

一　竹國(竹ハ竹千代君三代家光公國ハ國松君駿河大納言)殊外成人悅入候それに付先比其地へまゐりし節竹え附人の事被申付候樣にと申置候定て申付られ候ハんと存し候

一　國事ハ一躰との外發明なる生れ付にて重疊の事にて候其御方別して御秘藏のよし左樣可有之事に候ろれ故存寄申入候間能々御心得生立候樣可被成候

一　幼少の者利發に候とて立木の儘よ育候てハ成人の後氣隨我儘になり多くハ親の申事も聞ぬものにて候親の申事さへ聞ぬ樣よ成候へば召仕の者の申事ハ猶以の事に候左候へバ後に國郡を治候事ハさてをき我身も立申さぬ樣になり申候一躰幼

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

少の節ハ何事も直なるものに候まゝいかやうに窮屈にそだて候ても最初よりの仕付次第にて外より存るほどハ太儀にもなく候これを植木にたとへ候へバ初め二葉にかひ割らせつ人の産立と同じ事故随分養育いたしもはや一二年もたち枝葉多くなり候節そへ木いたし直になり候様に結立そのうちにあしき枝ハかきとり年々右の通手入いたし候へば成木の後直成能木になり申候人も其通四五才より添木の人を附置候て悪き枝をかき我儘にそだゝぬ様に致候と後直に能人になり申候幼少の時ハ育さへいたさばよきと心得我儘にいたしをき年比になり急に異見致し候ても我儘のあしき枝斗茂り本心本木ハ失ひ候事故直り不申候是にハ今以存出候事有之候三郎事(岡崎三郎)出生の節年若にて子供珍らしく事の上ひがひす故育さへすればよきと心得氣のつまり候とハいたさせず氣儘にそだて成人の上急に色々申聞候へども兎角幼少の時行義作法ゆるゆるに捨置親を敬ハする事を不存心安く存し後と親子の爭ひの様に相成候て毎度申ても聞入ず却て親を恨ミ候様に成行申候夫にこり候まゝ外の子供ハ幼少より我等が前にて行義作法よく仕付け候ものへ申しつけをき若し少しにても不行義我儘のことハ我等へ隠し申さず逸々申し聞け候様に申し付け候て聞置

前へ出で候節毎度或ひハ叱り又たハ是れハかやうにハ致さぬものぞと一々申し聞候故陰日向なく直にそだち申し候第一親をこはく存じ候へば慎しみよく幼少より親へ孝行いたすこと覚申し候其の上小身ものと違ひ召仕候ものゝ申すことを能く承ハり候様にと申す事専一に申聞け候事に候親の在るうちハ慎しみ候ても親の居ぬ時節になり我儘に成國郡を失ひ候もの古しへより多くこれあり候兎角常々側にて召仕候守の者の第一孝行と天命と下へ慈悲をかけ武家の事幼少より申聞け候へば自然と身持能くなるものにて候君臣と申すことハ定まりしことに候へども君たるものハ臣を君と心得申す事専一のよし我幼少の節安部大藏毎度申し聞かせ候尤とも臣として君につかへ候事故いかやうに無理なる事をも是非なく承ハり無道の君へも仕へ候へども夫れにてはまさかの時の用に立たぬものに候兎角上よりハ何事によらず慈悲をかけ贔負偏頗なく賞罰を正しく臣を君の元と心得候へばよく候臣ありての大名なれば召仕候ものなくてハ大名の詮ハなく候兎角幼少のものにハ召仕候ものゝ言を能々きけ〳〵と常々御申し聞かせなされ候にと専一の事に候人ハ人を鏡として身を正し候はかなく候

(以下次號)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○泰西箴諺の直譯

(甲)㊀大なる㊁多言者(は)㊂瑣少の㊃爲者、成者、行者

(乙)㊀火傷したる㊁小兒(は)㊂火(を)㊃畏る

(丙)㊀温順なる㊁返答(は)㊂怒(を)㊃他所に、遠くに、㊄轉ず

(丁)㊀爾自身(の)㊁如く㊂爾の㊃隣人(を)㊄愛せ(せよ)

MAXIMS & PROVERBS.

泰西の箴諺

(甲) Great tālkers, little doers.
㊀ ㊁ ㊂ ㊃

〔意譯〕手は口ほどになし

(乙) The burnt child dreads the fire.
㊀ ㊁ ㊃ ㊂

〔意譯〕火傷したる小兒は火を畏る

(丙) A soft answer turns away wrath.
㊀ ㊁ ㊄ ㊃ ㊂

〔意譯〕温言は怒を轉換す

(丁) Love your neighbor as yuorself.
㊄ ㊂ ㊃ ㊁ ㊀

〔意譯〕人を愛する事我を愛するが如くせよ

SIROKI IRO

Me no mienu hito *Siroki iro* wo, me no miyuru hito ni toikeru ni, me no miyuru hito kotaete:—

Sore wa yuki no gotoki mono nari, to ieba;

Mekura. Hiyayakanaru mono wo *Siro* to mōsimasu ka ?

Meaki. Iya, iya, hiyayakanaru mono dewa gozarimasen; sio no gotoki iro de gozarimasu.

Mekura. Soredewa siohayuki mono de gozarimasu ka ?

Meaki. Iya iya, sōdewa gozaranu; satō no gotoku, kami no gotoku, wata no gotoki mono de gozaru; to nengoro ni osiesikaba;

Mekura. Hā, hā, *amakusite usuku, te-zawari katakaranu mono de gozari-masu ka* ? to tsuini *siro no iro* wa ikanaru mono taru ya wo satoru koto atawazarisi tozo. Seken ni kono me no miyenu hito to onajiki mono ōkaru-besi.

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

◎内外列女傳

○小栗助重の妾娥子　（表靑傳）

小栗助重の妾娥子と云えるハもと賤しき者の女にハありけれども心ざまのやさしくして姿容の妖嬈なるハいかなる大家の御臺所と云ふとも恥かしからず沈魚落厂閉月羞花の譬えも胡説ならぬ程なればいつしか小栗の爲めに見初められてそが箆室となれりさるからに其の寵愛ハ淺からず天にありてハ比翼の鳥地にありてハ連理の枝と七月七日の夜半頃長生殿に星を見て深くも契り玉ひたる玄宗帝の楊太眞もおさ〱劣らぬまでなりければ早くも玉をも欺むくばかりの男兒を擧けてこれを万千代と名けつゝ親族小栗重英の手よ養育せし先居たりしかバ落城の折にこの万千代も箭よ中りて死去たり娥子ハまた万千代を産みたる後寵の衰へさるにハあらねども助重を別れて當時六浦と云える處に住みたりし母の許にかゝり專ら孝養を尽しありしに助重の妻照手ハ落城の後ハ良人助重必條娥子のもとに潜み居らんと思ひしまゝに遙々六浦よ尋ね來り端なくもこの家に宿りを求めよければ娥子ハ哀れみ只管母に説きて迎え入れたりしかるに母ハ日ごろ心ざまのあしき者なりければ其の照手なるを聞き落人の妻なれバ害するとて妨けなしこれを害して物を奪ハんとひそかよ外の方へ忍び出て仲間のものを呼び來りしが娥子にハいと情けなきことに思ひ照手にことのよしを告け知らして疾く〱走り去らしめおのれそが寢ね居りしあとの臥床よ入りて睡りしところ果して眞夜中ごろに至り母ハ兇徒を促がし來りて其の臥房の外より裡のやうそをうかゞふひつやにハに石を投げて寢ねたりし女のかしらを碎きしのばいかでたまらん臥したる女ハ聲をも得立てず死んでけり母并びに兇徒どもハこれを見て互ひに笑みを含ミまた飲代よありつけりとて悦びながら立入りて能〱見れば這ハ如何に照手と思ひて打殺せし女ハまさしく娥子なれバ皆々驚きて舌を捲き絶て言葉も出さずに悄々として逃去りしが流石の惡漢もこれよりして一念忽ち發起しつ佛に仕へて菩提を吊ひまた惡行ハなさゞりしとなん嗚呼娥子のごときハ誠に身を殺して以つて仁をなすものと謂ひつべきか

因みよ云ふこの助重こそ世に鬼鹿毛と稱する惡嘶馬に鞭ちて碁盤乗りをなしかたわ車とて今の世迄も其の名を藤澤寺にとゞめたる小栗判官其の人なり

○船將の妻リンカルド氏の勇氣　（前號續）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

風伯怒り雨師激し波濤万仭の山を築くかと見れば忽ち千丈の谿を穿ち帆檣折れ船体砕け午後十一時に至りて乗組員は一同に海の中へぞ陥りたりされども船將夫婦を始めおのれ等三四の者は辛じて浮かみ上り舵に取つかんとせしも苔滑かに幅さえいと廣ければ波の爲めに打ち離されいかんとも詮術なし縦やくにして爪又は牙もていさゝの穴を穿ち緊かとそこに取りつきぬ蓋し此の時人々の心地は如何なりけん魂半ばは海庭に沈み魚の腹へぞ葬られけり況して夫人は女の事なり嘸ぞや悲しくつらかるべきに世間の婦人の爲に倣ふて女々しく泣きも號びもせで子を思ふ身の一筋に一言つらしと云へばえにいわでの杜の岩つゝじ艶なる花の顔

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に笑みを含みしありさまは平生に變らで左手には末子シルダーを抱き占め右手もて舵に取縋れりおのれは直其の傍に取付居たるとなれば夫人のかよはき腕にては疲れて沈むともやわらん其の上風は猛り來て激する濤しば〳〵滌き去んとすれば隻手を伸して夫人の腰を抱き扶けてありけるが早や一時とも覺しき頃夫人の傍に取付居たる長子ヘイルはさもかなしき聲を出て寒さに得堪ずと訴えければ夫人は其の手をおのが胸に入れて暖めつシルダーもまた緊りと抱き占め濤にゆられてありける中遙るか陸地の方にあたりて土人等が獸の害を避くる爲に篝焚く火の波のまゝ〳〵見えければ陸地は巳に近づきぬるを知りたれども衣服は風波の爲めに破れ裂けて海草の如く肌膚は雨潮の爲めに冷凍えて血ばしるばかり生る心地はせざりけり巳にして四時頃に至り奔波來りてヘイル并びにヂョンソンと呼べる一個の水夫を打流せり此の時は陸地を距ること僅かに二百乃至三百ヤードの間にありて土人等が難船人よと叫ぶ聲の耳にも聞ゆるまでになりけれども海波未だ收らざれば誰れとて來りて救はんとするものなく舵も少しづゝ欠け損じ心細さ云はん方なきも夫人はいさゝの屈するの色なく翠髮風に梳つられて鬆鬖夜叉の如く必死と舵に取付居れり又夫なる船將は此の時しもいたく疲れたれど猶は二子ルシーを抱き居りしがルシーも堪えぬ寒に肌凍り腹飢たれば泣き出し哀れにもまさかすかなる聲をあげて阿爺よ〳〵兒は飢へ侍りぬ何にても食物を與え給へとせがむにやる瀬なみまにて今は何とてあらざればやがて陸地に上りなば望みに任せ與えんと賺せど實は時移つるも暴風たえて止む景色なく救の來る望みもなければ船將はルシーをさし上げ嗚呼と呼び誰れの來りて我が小兒を救へよや我が親愛なる小兒をバ助けよやと此の一言を此の世のなごりルシーと共に海底の藻屑とこそはなりにけりこれを見る夫人は心に如何ばかり哀しかるべきもいさゝか色に露さず乳を與えんと抱きし小兒を胸に抑當て一心不亂に保護し居れりやゝありて又大工水夫の兩人も打流されたりこゝに至りて始めて夫人は紅唇を開きおのれに向てヂョンストン氏よ妾が親愛なる良人と小兒は巳に逝けり次に逝くものは誰れなるらんと云はれておのれは答さぬ波間に響く佛國の遠くもあらぬ沖合にてわれ〳〵と共に難破せし船にて叩く鐘の聲も諸行無常の響きある祇園精舍の鐘とも聞ぬ忽ち止てはまたきこゆる其度ごとに冥途の旅を急ぐ心地に日光を再び仰ぐばかりのは親愛なる者どもの顏見るとも覺束なく只天運に任せ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

つゝ万一の僥倖を期するのみ暴風は猶尚ほ烈しければ夫人にも今は望みなしこれ迄なりと云はれおのれもまた所詮望みなしと答へり斯くてさきに海中に陥りてより風にさらされ波に洗はれ困難を極めたるに卅八時間時におのれが方に向て暴風を凌ぎ激浪を冒し揖を操りて漕ぎ來たる一隻の舫艇あるを發見せしかば枯魚水を得るの悦びありされども其の舫艇も波に覆れ屢々覆沒せんとなし漸くにして近付たれどおのれ等を救ひ上ることかなはず彼れこれするうち勇敢の者ありて舵の上に飛び移りこれに綱を付けて引寄せながら一生懸命舫艇に飛び乗れよと云へど夫人はこれに乗るも船体小なにして人多ければいかでこの激浪を凌かんや覆沒するに相違なし今にもはや潮水の充ち居るにあらずやとて從がはずおのれは其うち波の下に沈みしも息を閉ぢてありけるが二人の土人飛び入りて縄をつけて陸の方へ引ぎ上げ直に此地にある佛國の醫師の許に誘ひゆき又一隻の舫艇を出して裸体もひとしく破れたる衣のまゝ透し見ゆる雪の肌も血ばしりし夫人を救ひ上げつゝも同じ醫師許連れ來たりて厚くも介抱なしたれば夫人ルシーれのれの三人は不思儀に生命を助かりたり今思ひ出すさへまことにおそろしき程なるにリンカルド氏は婦人の身をもてよくもこの艱難辛苦を事ともせず勇氣を鼓して生き延られしは世にもまれなる勇婦にこそ

松田さつ女の傳　（續稿）

お道はつぐ〳〵跡見送り去がし涙に咽びたるがかくてあるべき事にならねば部屋に歸りて默然といつにかはりし樣子を見てさつは訝かり尋ぬればお道は隱さすこれ〳〵にて親までの恥辱をうけたり無念さすことにやる方なしと云ふをばさつはかばかりの間違は世に儘々あるならひ必らず氣にばしかけ給ふなといろ〳〵に慰さめければ漸やく心も和ぎたるゆゑ酒肴を取揃へ今宵はもはやは用もあるまじは酒一とつ召しませと勸めにお道も悦びの眉をひらきてとも〴〵に酒汲みかはし機嫌よくやがて帯と小袖とを取いだしさつに與へていふやうはそなたこそは月比日比眞實をもて世話するゆゑぞふがなとは思へども折もなしこれを肴に酒一とつ過してたもれと與ゆればさつもいたく悦びしがお道はさても人の生命といふものははかなきものなり明日をも知れぬが此の世のならひと云つゝ涙さしぐみしをさつは諫めて御兩親さまのましますうちはおん壽きを悦び給ふこそまことの道ならめ努々さやうのはかなきことと宣ふまじお道はこれを聞きてなるほどそなたの云ふ通

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り父様母様へもかりそめの孝行もつくさずにと涙押へて臥床へ入ればさつもやがてうち臥したり已にして夜もふけ人定まり長廊の銅行燈も光り暗淡たる頃ろお道ハそと起き出てゝ涙と共に書かき終り手道具をば文庫におさめて夜も明けにければさつを起しこの文匣何卒両國矢の倉なる父母の許へとゞけてたも委ハしきことハ書よ認めあれば別に口づから傳ることもなしとて文匣を交付たれバさつハ受取り日比谷門の邊りまで行けるに何とやらん胸打さわぎ心地死ぬべう覺えて一歩だも進み難かり依て思ふに先刻まで何の兆もあらざりしに今斯く俄かに心地ぐるしきハ若しや主人に異變のとにてもありつるか昨夜の様子にてハ何やらん心もとなし這ハ矢の倉へハ行かとも一先づ歸りて様子を見んとて其が儘後に歸り來て襖押し開け屏風の中をさしのぞき見れば這ハ如何に胸打されぐも道理なれ無惨やお道ハ衣着ひきかつぎ白小袖に水晶の珠數を首にかけ手に普門品を握りて自殺し居れり（自殺の短刀ハ來國光作と云へり）さつハ驚き肝魂も消入るばかり呼べと叫べと詮術なければ暫し涙に暮れ居たりしも屹と心を取直し此の場に於て狼狽なバ主人も犬死となりぬらんも測り知られず大切の場所とハてゝなるべしと思案定めて死骸に向ひおん前さまの仇ハ目前にあり

只今討つて手向申さんと流石ハ士分の娘なれば衣服を更め甲斐〳〵しく局澤野の部屋に到るよ澤野ハ茶の間にありておすゑと呼べる女を叱りつゝありさつハ太く驚きたる体にて慴りながらお局さまに申上ます主人お道様こと今朝眩暈いたすとて打臥し居られしが只今氣絶せられぬ何卒御覽遊バしゝ上よきやうよおん計ひを願申すと涙かたでに述ければ澤野ハ聞て驚きもせず开ハ定めし癪の起りつらんに醫師を呼びて見せてんと下婢ひさと云えるを引連れてお道の部屋へ到りければさつハ間の襖を開き後よすざりて准備そるを知らぬ澤野ハお道どの澤野が伺候にまいりましたと云ひつゝ屏風に入る所をさつハ飛ひかゝりて胸ぐらとらへ怒りの聲をふるハして此老ぼれめよくも大切の御主人に草履を蹴付て恥かゝせしぞ武士の女の恥しめられてハ一ぶんたゝぬと那の通り自害をなしてはてられたりよくも人を口先にて殺せしなとお道が持たる短刀にて澤野が喉を突きたるうへ三刀四刀剌貫けば澤野ハ難なく息絶えたりおひさならびに後れて來たりしおそわの二人ハこれを見て逃げ出し聲を限りに呼たてたれば殿中の騒動大方ならず奥家老堀次郎太夫奥目付小池利右衛門早速よ馳せ付見ればさつハ手早く短刀を収めて両人に向ひ妾事ハ道が下婢さつ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

と申す者に侍り主人道事お局様に恥ぢしめられ其身立ちがたしとて斯く自害致せりされば局様は取も直さず主人の仇に候へば捨置がたくて此の始末に及べりいかやうにも御仕置仰せ付られたしと平伏すれば次郎太夫は主人の仇とあるうへは供に天の戴かざるが世のならひ女の志にしては神妙なり併し様子もあらん撿使の來るまでは部屋に愼みあるべしと廣敷に番三人を置きて守らしめしがやがて此の趣周防守に達し撿使として岡嶋何某大目付兩人奥家老立合にて糺問の上口書を取りさつが前に持ゆきし小文庫文匣の封をきりて撿むるに中に夫れ〴〵の小道具あり文の折返しの上包ともにお道の自筆にて其の文は遺書なれど餘りに長文なれば看客の退屈を憚りて次號に讓る

◎群芳詞苑

○初春瀧　　茨城縣　宮本　恒祐

筑波山積れる雪やとけにけんをとまさりゆく椎の尾のたき

○開梅　　同　　永長平八郎

とく來なけやよや鶯わか宿の籬の梅ははなさかりなる

○惜春　　淡水小量　高城　滿十年

屋後櫻花落過半。遙聞雲雀日邊諢。東君辞去今安在。田畔唯省忙水車

評詩負優於齢

○秋苑蹈紅葉　　香雲女史　瀧口

經霜楓樹繞山阿。滿眼如花張絳羅。地上又看紅葉落。騷人止歩坐吟哦

評此詩恐是女史咳唾中之物

○琵琶湖舟中雜感　　鐵心居士　橋本

千秋不竭琵琶湖水。歲々浮沈世上人。設使琵琶湖無逆浪。世波到處自酸辛

評琵琶湖逆浪不及世波酸辛

◎女紅

○產湯の湯上げを縫ふ法

初生の孩兒を取り上げて產湯を沐せる時に抱きあげる湯上げは長短に縫ふべき法なりこは陽常に餘りありて陰つねに不足する意を取れるなり又畏の處ろ明けて縫ふこれをつゆさらしと申し端を紅と水色に染めて陰陽を表することと〻ぞよく〳〵心得べき事なり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○裁縫

裁縫のみちハ女の誠に知らずてハかなハぬ事なり而して裁縫の法にも種々あれどつまるところハ仕立ばげの早くして手際なるを賞美することとなり今ろの裁方を云ハんに第一これを學ぶにハ紙にて本綿巾又ハ一尺二寸巾の二尺巾等の幾分の一かを雛形に取りこれを以て一ッ身なり二ッ身なり順次羽織等の寸尺を心に覺へ居りやさしきものより裁ち習ふべし又縫方を學ぶにハ二重の布を眞直にいく回も縫ふべし而して長さ二尺巾の一尺のものを二重に襲ね縫込みを定め置きて其縫目の曲りくねらぬ樣になし斯して單衣袷綿入夜具羽織とやさしきものより順を逐ふて縫ひ初むべし必す能く縫へるヿなり

○絹布を張る法

羽二重加賀絹日野絹紬のたぐゐハ葛と粘とを等分にしてとぎ刷毛にて引くべし緞子紗綾ハ一反に粘一匁がほどに大白砂糖五分海蘿三分ほど入れよくとぎて布にて漉し刷毛にて引べし縮緬ハ粘を少し減しせうふ五分まぜて刷毛にて引べしこれ良法なり

○香道

香を翫そぶのことハ既に古くよりありて婦女子にハもつとも上品なる藝道なり文亀の頃にハ上に逍遙院公あり下にハ志野氏あり香の道ハ之れよりぞ多く定まりぬ志野氏ハ三世家聲を墜さずこれにつぎて起りしハ建部氏あり又其の後米川氏志野の古流をうけ繼て却つておのれの一流を起こそ其の後に至りてハ繼くもののなくこの道衰微に赴き居りしに大枝流芳氏出てゝ其の末流を汲み兼ねて諸流をあつめて香道の古法を起さむとはかり一時熾んに行ハれたり今古來より有り來るところの組香の目錄を左に

無試十炷香	花月香	宇治山香	小鳥香
郭公香	小草香	系圖香	燒合十炷香
源平香	鳥合香		

以上十組ハ志野流に用うるところの十組香なり(以下次出)

○ツールン氏西洋料理法の翻譯(前號の續き)

扨て此次に食料品撰び方の心得は賄方に於て甚た必要なるが故に是より其心得も記載せんとするに當りまづ獸肉各部の名稱を知らさる可らず

牛肉各部の名稱は左の如し此分ち方を倫敦風と云ふ

㊀腰肉㊁弓形骨㊂臀肉㊃後股或ハ丸肉と云ふ㊄鼠臀㊅脈部㊆厚脛㊇薄脛㊈後脚㊉後肋(肋骨五對)(十一)中肋(四對)(十二)前肋

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

（三對）⑬前股⑭胸部⑮塊肉⑯頸肉⑰前脛⑱頰及び頭肉
（小牛及び羊豚等は略す）

食料品買入の心得　　賄方は可成自身に市場に至るべし然れども實際に於て多少の經驗を要すること多し今この事に熟練せざる御婦人の爲に聊か品物撰び方の心得を記すべし
牛肉は最も必要なる品なれバ牛肉より初むべし元來牛肉の最良なるものは牡牛にして屠殺の爲めに五六年間飼養しゝるを最もよろしとす能く飼ひ立てたるものは肉理美かにして光澤ある赤色をなし脂肪の紋理を交へたり脂肪の色は白色なるを要す黄色を帶びたるものは良肉にあらず凝脂もまた堅きをよしとす肉中に脂肪の多からざるものは硬くして悪肉なり小牝牛の肉は牡牛の肉よりも少し白色を帶び肉理緻密にして脂肪の色白く骨形稍々小なり牡牛の肉にても肉色暗黑を帶び肉理疎にして脂肪少く肉臭甚しきは料理用に供すべからず買入の時能く〳〵吟味すべき事なり

（以下次號）

◎稗史小說

○英國小說剪燈情話　（第一回の續）

山橋村排士過友
禮拜堂非利成親

這の客ハこれ倫敦城裏に住まへるの人にして姓ハ坡名ハ非利と呼び本とこれ一個世家の子弟なるが堂上早く物故して家計もまた蕭條たるをもて弟と共に伯叔の家に養ハるこの伯叔ハ家產豐裕にして年もはや老たれども子と云ふものあらざれバ彼等兄弟二人の者ハ常に覬覦嫉妬の心あり伯叔もまた意氣投せざりきこれハさておき非利ハ排士と少年のころより深き友垣を結び居たれハこたび遙る〳〵來りて相訪ぬる必ぞ要話のある事にて非利ハ終に客房に入り坐定まるといへども排士の未だ來らねバこれを待ちて靜かに坐すると能ハず起ちて房の內を徘徊し蹉來蹉去のとき恰かも排士の來りて其の房の內に入る脚步の聲の耳に聞えたれバ臉ふりむけて一看するに正しくこれ排士なりさてハと忙がハしく手を伸ハしてその手を緊握しまた細々と排士の衣服より靴のさまを見て歎じて云へるやう吾が老友何しにかくハ零落たるぞわれハ幾んど君なるか將た誰れなるかを認識する能ハぬまでに變り果しとされども排士ハ徒らに其の友に久しぶりにて遇ひたれバ歡喜びに禁へすせわしく呼んで吾が友非利君にハ何の貴幹ありて遙る〳〵大駕を勞してこの僻壞へハ來られしぞ願くハ先づ敎を賜まへと云ひけるにぞ非利ハ打笑つて地の僻なるに因て特意來りた

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るなれ近くバ何しに來らんや請ふ君まづ坐られよ緩々細かなる談話もすべけれども先酒を呼び來りて以て談興を助けんと排士ハ聞きて掌を拍き云ひけるハ我々兩人今また酒をくみて情景を叙るハ倘ほ幼きときに異らねば吾が近來の艱難勞苦ハ暫ばしが程忘れつべしと酒數行のころよ至り非利ハ聲を低め口尖らして告げゝるにハ愛友よ吾れ今一の秘事あり君に依りてこの事を其れ〳〵辨理せんと欲すされども言おのれの口を出てゝ君の耳に入る君さえ言ハずハ誰れありて知るものあらん幸に秘して人に洩を勿れと排士は答えて疑ふまも程こそあらめ何しにおのれ秘事を洩さんや我か密友ハ只た君一人能く君が事を成とぐるも亦我が一生の福のみ但しこれ如何なる大事ぞ請ふ先づかくさず告げられよと言未た畢らざるに非利ハわれこゝに來たりしハ他の事にもあらざるなり實ハ一段好因緣のあるありてそれか爲めに來りしなりと言ひ畢りて哈々と打ち笑ふを排士ハ忽まち色を變へ貌を改めて對ふるやう凡そ婚姻をなすハ人生の大事に係る父母の命ありて朋友ハ相賀すさるを君ハ獨りこの僻鄕に遙々來りてこの事をおのれに依て辨せんとすおのれ敢て解せざる所ろなりと非利ハ云ふ老兄の云ふところこれまことよ是なりとまた酒を斟む一杯なみ〳〵と飮ミ乾して遂に席を他に移りし膝を接へて密やかよ果して何事をか云ひ出づる二人の外ハ誰れとても知るもの絕てなかりけり非利云ふ吾が家の伯叔ハ君の豫ねて知れる如く貲產鉅大なれバ其の業ハもと我れに傳ふるならんされども今我が慮かるところハ倘しも我れ他の意よ合ハざることあれバ勢ひ必す別にこれを我が弟に傳ふるならん伯叔の人となりハ嚴厲高傲家世門第の見はなはだ重し倘し已が商家の女を娶らんと欲せハ極めて他の歡心を失ひろの事必らず成就する能ハざされども我が眼睛中この國ハ愚か天下竟に只たこの一個の女子あるのミ惜むべし他れ養ハれて商賈人の家にありよつて如今我が意ハ已に他をめとりて百年生を托そるのとに決定せり惟だこれ事、秘密にして吾が叔と弟との耳朶に觸れしめ以て我が伯叔の產業を襲ぎ得べきの一大好機會をして逸去らしむべからずと排士ハ沈吟して然らハ其の佳人の親びとハ已にその細き事情を知り居らるゝにやと問ひかへされて非利ハ又如何なるとをか說き出づる

（以下次號）

○御伽草

○燈謎

南面而坐北面而朝象憂亦憂象喜亦喜　打二一物一

天運人功理不レ窮、有功無レ運也難レ逢　打二一用物一

因レ何鎖日紛々乱　只為二陰陽數不一レ同

○謎

うしとかけて唐辛子をなめた子供と解く其の心如何

東京の國の名とかけて無性者と解く其心如何

○考へもの

兎に袋を被ふすれば一匹の鳥となる其の鳥はなに

◎机の塵

○下紐の事

志賀理齋が三省錄にあるふミを引きて云ふ下紐のこと堂上の上﨟の上袴下袴二ッ着することとなり其の下袴の紐なり寐るときと契るときにはの紐をとく故に戀の辭とせり井手の下紐など云ふ事あり

ときかへし井手の下紐もきめくりあふせられしき玉川の水

○貝箱貝合せ

貝箱貝合せ久しきものなれども何れの世より始まると云ふことを知らす源氏なぞには見えす後鳥羽院のおん時西行の歌に「今ぞ知る一よ伊勢の海ふさミの浦の蛤を貝おはすとて拾ふものの

一にひろひとありこの頃ろ已にありつると見ねたり

れこそすれ

○雪踏

近ごろはまつたく廢れたれど人々のめでふみたりし雪踏はふるくよりありしものなりされど革をかふることは千利休居士の始めて製せしよし

○女房の名稱

御臺所とは御臺盤所といふ義にやあらん御は寢殿のもやにすませ給ひて北庇に女房の侍あり臺盤所といふ申すべき事あれは御臺盤所の女房につぐる故しの申すなり北の政所とは申すへき事を政所につぐるゆゑなり北とは女方におはしませはなほ北方と云ふも女方につけて云ふ名なり御簾中とはおはしますところをさす奧方とは家の奧もやにすむ義でしんぞうとは深窓と云ふに似たり長恨歌なるは未嫁女のとなれどそれも奧ふかくすむ故の義なれば人つまをいふも其の義にて意かよふにやあらん尾張にてごつさまとはふは御室樣といへるにやかみさんといえるは物語にあるうへといふに似たりまた何がしのお方と云ふ其の家さまをさしていふあり女房といふ義も奧深かき方によれるにやかゝと云ふは其の義を知らす俗には嚊と云ふ字を書きて嚊とよませりしかれば亭主の事をよく嚊しりて井戸端などにて喋々うはさするもゆゑにや呵々

○一釵七十万錢

むかし唐山に馮球と云へる人あり中々の奢り人にて其の妻に七十万錢の釵をこしらへて與えたりこの事を聞て王涯と云える人がいとゞ歎息せしことあり今我か邦などにては何百何千圓と云ふ釵を插す人ありもし王涯が見なば歎息甚しからん

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

諸中外国の度量衡金位を評論すれハ或ハ其度量衡金位を其まゝに用ゆることなきにあらず且ハ看客の常に之と記臆するあらバ他ゟ便利なること多かるへし依て茲ニ其比較概略を掲載す

總（グロス）	百四十四個
打（ダース）	十個
リーム	紙ノ一束
噸（トン）	凡我千六百八十斤（二百六十八貫八百目）
ホンドルドウエート	凡我八十四斤（十三貫四百四十目）
封（パウンド）	凡我百二十目
兮（オンス）	凡我八匁二分八厘
基（キログラム）	凡我二百六十六匁
担（ピコル）	凡我百斤

英哩（マイル）	凡我十四町四十五間
碼（ヤード）	凡我三尺一分一厘
英尺（フート）	凡我一尺
英寸（インチ）	凡我八分四厘
磅（ポンド）	我金貨五圓
弗（ドルラー）	我銀貨一圓
ループル	凡我七十五錢
志（シルリング）	我二十五錢
馬克（マーク）	我二十五錢
法（フランク）	我二十錢
片（ペニー）	我二錢一厘
錢（セント）	我一錢
參（サンチーム）	我二厘

各滊車出發幷出船時間表

○東京横濱間滊車出發時間　午前六時三十五分、八時、九時十五分、（但急行列車横濱ヨリ八時五十分）九時四十五分、十一時〇午後十二時十五分、一時三十分、二時四十五分、四時、四時四十五分、（急行列車）六時、七時十五分、八時三十分、九時四十五分、十一時（大森鶴見ハ停車セス）

上野高崎間幷前橋滊車出發時刻
上野發　午前五時十五分、八時、十一時、午后二時十五分、四時五十分
前橋發　午前七時五十分、十一時十分、午后二時二十三分、五時五分
高崎發　午前五時卅分、八時十一分、十一時廿九分、午后二時卅九分、五時二十四分

上野宇都宮間客車出發時刻
上野發　午前八時、午后四時四十五分
宇都宮發　午前八時二十五分、午后四時四十分

新橋赤羽間列車出發時刻
新橋發　午前七時二十分、十時二十五分、午后一時二十分、四時十分、七時二十五分
赤羽發　午前九時七分、十一時三十分、午后二時五十分、六時五分、八時四十分

高崎横川間
高崎發　午前五時廿五分、九時、（急行車）十一時卅五分午后二時四十分、六時十分
横川發　午前六時五十分、十時廿分（急行車）后一時十分、四時四十五分、七時四十五分

東京横須賀間出船時刻
靈岸嶋、芝金杉、品川出船午前八時、十時、午后一時、四時（但シ横須賀出船同刻）

横濱、横須賀間出船時刻
横須賀發船　午前六時五十分、十時五十分、午后一時四十五分四時十五分
横濱波止場發船　午前八時十五分、十時四十五分、午后一時三十分、四時三十分

廣告

○歐米女權　中村敬宇先生序　湯目北水先生編纂　全壹冊　定價三十錢　郵便税四錢

○淸國漫遊誌　成嶋柳北先生序　副嶋種臣先生閲　曾根俊虎著　正價金四十五錢　郵税自便

○婦女庭訓の眞鏡　東條竹翠著　繪入かなつき　全壹冊　定價三十錢　郵便税四錢

○女子作文楷梯　七條峯太郎編輯　女子必携　鼇頭作文要用字類　和製中本全壹冊　定價金貳拾貳錢　郵便税四錢

○明治流行うそ八百　滑稽新話　壹冊正價二十錢　郵税四錢

○忠經旁釋　漢馬融撰　日本佐藤梘先生旁釋　木板手刷　正價拾錢　郵税四錢

○明治英名傳　正價郵税共金三十錢

○人間長壽法　人命保險　正價郵税共三十錢

○東京高名鑑　正價郵税共二十五錢
此書ハ府會議員、區會議員、新聞記者、演説者、詩文書畫の先生、代言人、等を掲載したる重寶の本なり

一右書籍の外逐次出板書籍廣告仕候間續々御注文を乞ふ

千葉師範學校體操教師馬場壽先生著　訂正增補　小學徒手體操新書　第二版　美本全一冊　定價八錢　郵税二錢

○啞鈴體操新法　馬場壽先生著　美本全一冊　定價金十錢　郵税金二錢

小學生徒　美容術　馬場壽先生著　全一冊定價金六錢郵税二錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

馬場壽先生著
訂正增補小學徒手体操新書
農學士翦地熊太郎編述
○化學理論一班 全一冊
嶋津倉治編輯
○明治新刻日本溫古類聚 全壹冊
小池民次序
新撰 小學遊戲書 全一冊
馬場壽著

定價金六錢 郵便税二錢
定價金二十錢 郵便税金六錢
定價金三十錢 郵便税金六錢
洋本仕立小本 插密圖 定價金拾五錢 郵税金四錢

千葉本町壹丁目
立眞本舍

東京大賣捌所
積文舍

十九年三月廿七日發兌
團々珍聞五百卅七號目錄

- 一 洒性説 髮ノ毛ノ賣却
- 一 珍報 種々○梅信○千歳座景況
- 一 狂畫 越後屋のかもじの圖○大時計修復の圖
- 一 和漢欄 狂詩歌句都々一
- 一 出放題 謎解答 并 新題
- 一 英和對譯 齒と舌との噺
- 一 内外奇譚 滑稽瀛車栗毛 第八回
- 一 一週要報 種々○東京各新聞新説表

三月廿七日

東京神田雉子町
團々社

佛國女學士路易達爾克原著 伊藤重固君譯
東京大學教授櫻井省三君閲 山成哲造君校
西洋 束髮秘傳 附 化粧秘傳 全一冊美本
密畫廿七入 定價六十錢郵税共六十四錢

此書は西洋に名高き佛國風の束髪及化粧の秘法を示すものにて種々の束髪を自身に爲し得る法を説明し其他髪の治療法を數多傳授せり又化粧術は我邦にて思付さる奇術多し御講讀の上御試驗あらんとを乞ふ

大賣捌所 東京神田雉子町 團々社支店

發行所 東京々橋區南鍋町貳丁目拾壹番地 積文舍

持主兼印刷人 松本義弘
編輯人 山田常給

女學叢誌賣捌所

東京芝區愛宕町一丁目三番地	大賣捌所 修正堂
同 神田區淡路町	同 巖々堂
同 神田區雉子町	團々社
同 日本橋區新葭町	良明堂
同 牛込肴町十七番地	活神堂
同 芝區愛宕下町二丁目	高機堂
同 蠣殼町貳丁目	信文堂
同 本郷區本郷元富士町二番地	盛春堂闘田
同 同 本郷春木町貳丁目	解明堂
同 神田區佐柄町廿一番地	東海堂
同 牛込區牛込神樂町	積善舍
大坂府備後町四丁目	岡嶋支店
千葉縣千葉本町一丁目	立興舍
藝州廣嶋大手町一丁目	早速社
江州彦根西内大工町	新々堂
陸前國仙台大町四丁目	水村文助
越後國長岡裏壹之町	大橋書房

驛遞局認可

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY